

# 現代文明と欲望論

——仏教幸福論の視座から

川田 洋一

## 〔1〕現代文明の病弊

地球温暖化現象に象徴されるように、緑の惑星<sup>1</sup>ガイヤ<sup>2</sup>が病んでいる。

オゾン層の破壊、森林、特に熱帯雨林の減少と砂漠化の進行、脅かされる生物種の多様性、水質汚染、海洋汚染、河川の富栄養化、山積する廃棄物の問題等が、地球温暖化、異常気象と相互に関連しつつ、地球生態系を破綻へと追い込もうとしている。

人類を含んだ地球上の「生きとし生けるもの」の相互連関の糸が、いたるところで分断され、自然生態系の<sup>3</sup>ガ

イヤ<sup>4</sup>としての働きが、著しく傷つけられ、いたるところで再生を困難にする領域にまで、至りかねない状況である。

このような、現代の文明社会が引き起こしている病弊について、ヴァイツゼッカー博士は、「消耗性疾患」といわれ、その原因は「浪費」にあるという。そして、この「消耗性疾患」の治療法として、「効率革命」を主張され、著書『ファクター4』のなかでも、具体的治療法として五十の事例を紹介されている。今後も、これらの事例は、改良され、増加していくものと大いに期待している。

しかし、博士は、「エコ効率革命」を「時間の節約」「時間かせぎ」と表現され、その間に「文明の著しい進歩」を切望されている。

本論は、「文明の進歩」に関して、仏教がいかなる貢献をなしうるかを、欲望論、幸福論の視座から考察するものである。

ヴァイツゼッカー博士は、現代文明の本質とそのメカニズムを、次のように説明されている。

「経済学に支配され、トマス・ホップスの人間学のもとにある現代世界では、利己主義が活況を呈している。現実主義者と自称する人は皆、自分の生活体験をたえず他人の利己主義よりめだたせようとする」<sup>(1)</sup>（『ファクター4』）

「私たちが示唆を得た経済学者G・シエルホルンがあきらかにしているように、問題の多い典型的な西洋の人間学が『飽くことのない欲求の定理』という経済学の基礎である。表面的ではあってもすぐに満たされるべき欲求が非物質的欲求の成熟と充足に優先する。この優先順位は西洋文明の中で生

まれたものなのだ」<sup>(2)</sup>（『ファクター4』）

ここにいわれる典型的な西洋の人間学とは、人間を本質的に利己主義者と見なす人間観であり、現代経済学は、そのような人間観を基盤として、利己主義から発する「飽くことのない欲求」の充足を促しているというのである。

しかし、博士自身は、このような現代経済学と欲望論に対して、次のように反論されている。

「しかし、欲求の充足は物とサービスの購入によると仮定することは、実にグロテスクな単純化である。実際に私たちが真の充足感を抱くのは、むしろ親しい人々に認められること、なんらかの実現のために働いて、やりがいのある将来への希望を呼び覚ますこと、友情、愛、公正さ、知識などである。どんな宗教や文化も、そのことを知っているはずだ」<sup>(3)</sup>（『ファクター4』）

仏教も、世界宗教の一つとして、他の偉大なる宗教とともに、「非物質的欲求」を重視し、その内実を包括

した立場から、欲望論と幸福論を形成している。この点については、「2」以後に後述することにして、現代経済学と欲望について、さらに考察を進めていくことにする。

暉峻てらおかいつこ淑子氏は、西ドイツ(当時)での体験等から、一九八〇年代後半の、バブルのピークにあつた日本を見られて、真の「豊かさ」についての著書『豊かさとは何か』を発表されている。そのなかに、経済学と欲望論について、次のような見解を示されている。

「生産は、昔は、飢えに対する食物、寒さに対する衣服、家のない人への住宅等を意味していた。しかしいまは、いっそうぜいたくな、ある意味では不道徳で危険な欲望を作り出すものに変化している。数多くのなくてもよいような製品がなぜ必要か。欲望をかきたてるためのあくどい宣伝や売りこみがなぜ必要か。疑っている経済学者は少ないが、それに対しては『より多くを欲するのが人間性だ』(中略)等の反論がでてくる」<sup>(4)</sup>

暉峻氏は、宣伝や見栄や販売術によってあやつられ

た欲望を「かきたてられた欲望」とされ、一方、かきたてられた消費ではなく、「自主的に決定された欲望」への転換を主張されている。

そして、現代の物質とエネルギーの消費社会をささえる経済学の消費需要の理論を、次のようにまとめておられる。

「一、欲望が充足されても、欲望は減退しない。肉体的欲望の次には心理的欲望があり、心理的欲望には限りがない。また欲望充足を『証明すること』は難しい。充足という概念は、経済学には存在しない。

二、欲望は消費者の個性に根ざすものであって、その欲望がどうして生じたかには、経済学者はかわらない。経済学者は、精神状態のあらわれを研究するのであって、精神状態それ自体を研究するのではない」<sup>(5)</sup>

このような経済学の消費需要の理論に対して、仏教は、どのような欲望論を提示しうるのであろうか。はたして欲望は限りないものであり、人間にとって欲望

充足はありえないのであろうか。経済学者が、「かかわらない」という欲望の源泉について、仏教は、いかに関わることができるのであろうか。

まず、仏教においては、暉峻氏のいう「かきたてられた欲望」を貪欲と表現している。貪欲は、煩惱の一つであり、自他を破滅に追いこんでまでも、どこまでも、生命の内奥から突き上げてくる衝動をさしている。仏教によれば、この貪欲は激化してくると、モノとカネへの執着から、他者への「慳（ものおしみ）」「誑（たぶらかし）」、そして「覆（罪過をかくす）」や「詔（へつらい）」等の随煩惱を引き起こしてくるという。不道徳で危険な欲望である。釈尊が生きた時代は、ほぼ紀元前五世紀頃とされるインドであるが、仏教は、すべての人間生命の内奥に、貪欲等の人間を破滅に導く煩惱を見出していたのである。これらの煩惱の発現は、二十一世紀の今日の物質とエネルギーの消費社会においては、宣伝、販売術等の欲望をかりたてる方法の巧妙さによって、ますます増大し、激化し、衝突をくり返している。

それ故に、釈尊は、次のように、快樂主義ではない真の幸福の道をさし示している。

「世の中にはこのような破滅のあることを考察して、賢者・すぐれた人は真理を見て、幸せな世界を体得する」<sup>(6)</sup> (115)

釈尊の言説に従って、破滅を引き起こす貪欲等の煩惱の源泉を洞察して、さらに賢者の見る「真理」とは何かについて論を進めていきたい。

## 〔2〕仏教の欲望論

釈尊の菩提樹下の悟りの体験を引き継ぎつつ、広大なる人間生命の内奥を解明しようとした大乘仏教の一つに、唯識学派がある。この学派によると、貪欲等の煩惱の源泉は、人間心理の深層意識（無意識層）にあるとする。「かきたてられた欲望」（つまり貪欲）とは、深層心理から引きずり出される衝動である。

ここから、仏教の欲望論に入る前に、欲望に関わる言葉の整理をしておきたいと思う。それは、「貪欲」と「欲望」の区別である。「貪欲」とは、モノとカネという物質

的欲望、権力欲、名声欲、名誉欲等の心理的欲望への執着から、一時の快樂主義に走り、その結果、自他を破滅に追いこんでも、なお、自己自身でコントロールできない衝動エネルギーである。このエネルギーが、今日のエネルギー多消費社会において、生命内奥から引きずり出されているのである。それは、ヴァイツゼッカー博士のいう「物質的欲望」であり、暉峻氏のいう「かきたてられた欲望」である。

このような性質の欲望——貪欲に関していえば、「欲望に限りはなく、充足を証明することはむずかしい」といえるであろう。しかし、人間の本来の欲望、理性、良心や大宇宙の「真理」によって照らし出され、人間の幸福への道を開くエネルギーとしての「欲望」については、経済学の示す、これらの欲望の性質は、当てはまらないと考えている。この点に関しては、次章で、マズローの欲望階層説を使いながら、論証していきたい。人間本来の欲望とは、ヴァイツゼッカー博士のいう「非物質的欲望」を基盤としたものであり、暉峻氏のいう「自主的に決定された欲望」である。仏教の欲望論は、

快樂主義のはてに「破滅」に追い込む「貪欲」の源泉を見出しつつ、そこから、真実の幸福——これは真実の「豊かさ」であるが——へと導く「欲望」への質的転換、昇華への道を説こうとしているのである。それは、欲望論から幸福論への道である。

さて、唯識学派によると、人間の意識(表層心理)の内面には、根源的自我意識としての深層領域があり、これを「末那識」と名づけている。そして、この領域に、一方では根本的な四煩惱を説き、あらゆる煩惱の源泉としている。同時に、他方では、これらの煩惱を打ち破る心のエネルギーを菩提即ち善心として説くのである。

残念ながら、現在の物質とエネルギーの多消費社会は、末那識領域の四煩惱を触発し、引きずり出してやまないのである。四煩惱の向かう対象は、物質的欲望と名誉欲、権力欲、名声欲等の社会的、心理的欲望である。末那識という根源的自我意識を汚染する四煩惱とは、我愛、我慢、我見、そして我痴であるという。

四煩惱の基盤は我痴である。我痴とは、仏教的には

無明と同義であり、大宇宙と生命の「真理」(明)への無知である。仏教では、大宇宙と生命の「真理」を縁起の法として説いている。この現象界のすべての存在は、関連しあい、相い資けあつて、創造的進化を織り成しているのである。このような宇宙と生命の真実のあり方(実相)に無知(無明)であり、それ故に、この現象界に張りめぐらされた「縁起」の糸を、自らのエゴイズムの為に切断し、創造的進化を破壊し、破滅に追いこもうとしている。そのような生命内奥のエゴイステイックな衝動を我痴(無明)としてとらえてくるのである。

ヴァイツゼッカー博士の、西洋人間学における利己主義の指摘は、仏教における「末那識」次元での我痴(無明)の発現と一致するのである。我痴(無明)は、末那識という深層次元の衝動である故に、その根源的エゴイズムを自覚し、コントロールすることは、きわめて困難である。

この我痴(無明)のエゴイズムが発動して「我愛」(貪欲)となると、他者との連関の糸を切断し、他者を苦悩に追いこんでも、自らの欲望をかなえようとするのであ

る。この貪欲には、限りはないのである。貪欲化しやすい欲望が、モノとカネに執着する欲望であり、さらに権力や名誉、名声に向かう衝動である。

その「我愛」は、欲求不満を抱きながら、どこまでも増大してやまない性質をもっている。そして、他者と比較して、優越感にひたり、差別心を引き起こして、その「我慢」である。「我慢」も、自と他を切り離して、そこに「差別」の壁をもうけ、比較して、優越感にひたるのであるが、逆に、劣等感にさいなまれることになるのである。

しかし、この貪欲のエネルギーが、突破しようのない壁に突き当たると、「瞋恚」という煩惱が生じてくるという。瞋恚とは、怨念、恨みとなり、それが激すると、自ら悩みながら嫉妬を引き起こす。そして、最後に、「害」という暴力性に走るのである。すなわち、「我愛」(貪欲)は、その欲求がかなえられない限りにおいては、不満を抱きつつも拡大しつづけ、「我慢」という差別化を引き起こし、欲求の充足が不可能となると、瞋恚のエネルギーと化して、暴力性、攻撃性にまで至るのである。

これらの貪欲や慢心、差別心や怨念をかりたてるのが、「我見」である。

今日の「かきたてられた欲望」を生命内奥から引きずりだしているのは、「不道徳」にして「危険性」さえもはらむ広告、宣伝であり、ある種のテレビの映像である。貪欲や瞋恚、暴力性、攻撃性を引きずり出す広告や宣伝、映像は、人間心理に内在化されて「悪見」となるのである。そして、人々は、ますます「悪見」にそまって、倫理性を失い、暴力性、貪欲性を増して根源的利己主義を強化していくのである。

こうして、貪欲や差別心や攻撃性の基盤にある「我痴」(無明)は、「悪見」に触発されて、ますますエゴイズムを強めつつ、他者との関連性を切断し、あらゆるエゴイステイックな煩惱をとりこにして、自他の破壊へと向かうのである。このような「我痴」(無明)から貪欲、差別心、攻撃性、悪見へ、そしてエゴイズムの強化へという「煩惱の悪循環」を、どこかで何らかの方法で転換しなければならぬのである。

その転換のカギとなるのが、「末那識」次元から意識

の表層へと発現してくる善心(菩提)である。仏教では、善心として、縁起、共生の智慧、自他ともの幸福をめざす慈悲(拔苦与楽)のエネルギー、不貪という貪欲をコントロールする力、不瞋即ち非暴力、根源的信、感謝、知恩、平等心、友情、誠実さ、勇氣、希望等を洞察している。それでは、どのようにして善心を強力に顕現させ、煩惱(悪心)の循環を打破り、善(菩提)の循環へと転換していけばよいのであろうか。そのための一つの手がかりを、マズローの「欲求の階層説」に求めたいのである。

### 〔3〕マズローの「欲求の階層説」をめぐる

マズローは、健全な人間の内的に発動してくる欲求を、段階的に示し、「欲求の階層説」<sup>7)</sup>を主張している。つまり、人間成熟のプロセスで起きてくる種々の欲求を段階的に整理したのである。

第一は、生理的欲求である。人間が生物的存在として生きるための最低限の本能的欲求である。この生存・生理の欲求は、食糧、水、衣服、睡眠、休息の場とし

ての住居の保障等を求めている。ここには、欠乏、貧困、飢餓からの自由が含まれる。つまり、人間としての「基本的ニーズ」である。

第二は、安全、安定の欲求である。誰からも脅かさず、安心して生きていける欲求である。国家のレベルでいえば、国民の安全に生きる権利である。医療、保健の保障、病気からの自由、恐怖（暴力やテロ）からの自由、犯罪からの自由、さまざまな医療対策、危機管理、インフラ整備などによる「安全に生きる権利」への欲求である。この欲求も、基本的ニーズに含まれる。

第三は、所属の欲求と承認の欲求である。社会参加への欲求である。ある集団に属したいという欲求と、他者から認められ、愛情をかけられたいという欲求である。さらに、基礎教育への権利欲求、公共福祉、経済的自立の欲求等も含まれる。

第四は、自尊・尊厳欲求である。自己自身の尊厳性に目覚め、誇りをもち、自己を承認しつつ、基本的権利を主張する段階である。一人の人間として社会的自立をめざし、自由意志にもとづく人生への欲求である。

次の段階へのステップとして見れば、就労や社会参加への機会の創出が必須となる。

マズローによれば、この四つの欲求は、人間としての基本的欲求である。地球上のすべての人々が、かなえるべき欲求であり、社会は、これらの欲求がかなえられるような条件を整えなければならないのである。国家、民族、社会や国連並びに国際機関、企業、そしてNGO、NPO等が協力しあって、すべての人々の基本的条件の充足に努力しなければならない。特に、基本的ニーズとしての食糧、水、住居や医療、健康、教育を含む、第一の生理的欲求、第二の安全・安定への欲求、そして、社会的関係へと進んでいく教育、経済を含む第三の所属と承認の欲求は、きわめて重要な人間としての欲求である。これらは、「人間の安全保障」の概念に相当する欲求である。その上に第四の自尊・尊厳の欲求があり、誇りをもって自由意志で人生を歩んでいける段階に入るのである。

マズローは、この四つの段階は、低次の欲求が満たされると、より高次の欲求へと段階的に進んでいける



と主張している。すなわち、第一の生理的欲求が整って、第二の安全の欲求がかなえられる段階に入る。社会、国家が安定し、ある程度の安全性が保障されると、次の社会との相互信頼、承認の段階へ、そして、社会的自立に至る。これらの欲求は、すべて、社会の条件との関係性から、順次に発動してくるものとされている。

しかし、マズローは、これらの欲求は基本的欲求であり、その基盤の上に第五の自己実現の欲求が発動してくるという。この欲求は、成長欲求である。

諸富祥彦氏は、自己実現している人の基本的特徴を、マズローの論文から紹介している。

マズローは、「自己実現している人の基本的特徴を、①病気からの解放、②基本的欲求の満足、③自己の能力の積極的利用、④ある価値に動機づけられ、それを得ようと努めていること——の四点にまとめています<sup>(8)</sup>」ここに、①病気からの解放とは、たとえ疾病をもつていても、それにとらわれず乗り越えていこうとする意思力を持ち、生命本源の力を発揮していることと考

えられる。②基本的欲求とは、これまでに述べた四段階の欲求の充足ということである。③自己の能力——才能、性格、身につけた知識、技能等を自ら積極的に活用できるということであり、自己自身の強化をしている人である。④ある価値とは、各人によって違うであろうが、自己決定した人生の目標、価値を追求している人ということである。マズローは、動機づけとしての存在価値として、真理、正義、個性化、自己充実、人生の意味、活動等をあげている。この四点が、自分のもっている可能性を最大限に発現している自己実現の人間である。マズローは、その人間成長の究極のところ、「至高体験」、個性化の究極の境地をとらえようとしている。

このようなマズローの、「個」から、それを超えて、「超個」の領域への志向性を、仏教の視座からとらえてみると、人間の欲求(成長欲求)として、次の二つの欲求を自己実現の欲求の上に設置したのである。つまり、第六に、人類共生の欲求、第七に、根源的・宇宙的欲求である。

第六の人類共生の欲求とは、この地球上のすべての人々が、これまでの四つの基本的欲求をかなえ、さらに、それぞれの自己実現を成し遂げつつ、ともに助けあって成長していこうとする欲求である。個人の生命内奥から顕現するこの欲求は、「個」の生命を超えて、「超個」(トランスパーソナル)の領域、すなわち、家族、地域、民族、国家、文化、文明、宗教そして人類の次元へと、拡大しつづけるのである。しかも、この欲求は、仏教の縁起の法がさし示すように、「相依相資」の智慧に照らされて広がっていくのである。つまり、他者と相互に依存しあいながらも、しかも、相互に資けあつて、「豊かな生」を築きあげようとするのである。

そのために「縁起・共生」の智慧は、慈悲という、他者の不幸に「思いやり」「共鳴」しつつ、ともに苦悩を乗り越えて幸福を築きゆくための善なるエネルギーとともに発動してくるのである。「縁起・共生」の智慧と、「慈悲のエネルギー」が一体となつて、「他者」へと貢献・援助の行動を起こすのである。それ故に、人類共生の欲求は、他者貢献の欲求ともいいうるであらう。

貢献・援助のあり方を、仏教では、四摂事<sup>(9)</sup>として示している。

第一に布施である。これは、物質的、精神的、技術的援助である。精神的援助のなかには、教育や知識が含まれる。第二に愛語である。具体的な行動においては、「思いやり」に満ちた、相手の勇気をわき起こさせる言葉を使うべきである。ここに、信頼が養われる。第三に利行である。これは、相手にとって利益になることを援助することである。

第四に同事である。相手と一緒になつて、これらのことを行なうのである。このような援助・貢献によって、他者の苦しみをともに乗り越えていく道が開かれるのである。特に、先進諸国の人々は、まず開発途上国における「基本的ニーズ」の充足のために、自己の才能、技能、知識、知恵、財力等を活用することである。第一の生理的欲求、第二の安全の欲求の充足を基盤として、他の欲求が顕在化すると考えられる故である。先進諸国の人々は、個人、NGO、NPO、国家や国際機関等を通じて、他者貢献の欲求を広げていくべきで

ある。

このような欲求にもとづく行動が、内在の善心——友情、信頼、非暴力、貪欲のコントロール、平等心、勇氣——を顕在化させ、強化しつつ、自己自身の境涯を拡大していくのである。そして、ついには、民族心や国家心を超えて、人類心と一体となる領域にまで至るのである。

この人類共生の欲求の拡大のプロセスを、内的に、心理学用語を使えば、ユングの「集合無意識」に相当するであろう。そして、仏教的にいえば、「末那識」の次元を超えた「阿頼耶識」という深層領域に相当すると考えられる。この「末那識」と「阿頼耶識」には、ガルトウングのいう「構造的暴力」が渦巻いている。それは、仏教の煩惱——三毒や末那識の四煩惱が、民族心、国家心などのなかに刻印、蓄積されたものと考えられる。

このような深層領域を、「縁起・共生の智慧」と一体となった「慈悲の実践」が揺り動かしていけば、内在する煩惱を打破し、それらを善心へと変革していくことができるであろう。漸進的ではあるが、人類共生の欲

求の発現としての具体的な援助・貢献の実践が、「善心・共生の輪」を広げていくのである。

こうしたプロセスを支える基盤が、第七の根源的・宇宙的欲求である。この根源的な欲求は、地球生態系と共生しつつ、人類意識を宇宙意識にまで高め、拡大していくのである。

大自然に憩いつつ、大宇宙の流転のリズムに生きる喜びのなかに、<sup>〃</sup>永遠なるもの<sup>〃</sup>、根源的なるもの<sup>〃</sup>を身心全体で感受していけるのである。それは、まさに宗教的境地であり、マズローの「至高体験」、チクセントミハイリの「フロー体験」を引き起こす源泉である。そのような至高の境地から、万物との一体感を味わいつつ、自らを生かすもの、<sup>〃</sup>永遠なるもの<sup>〃</sup>への感謝の念がわき起こってくるのである。その一念が、慈悲の心となつて発現してくるのである。

釈尊は、『スッタニパータ』の「慈しみ」の章のなかで、「究極の理想に通じた人」の偉大なる境涯を、次のように説いている。

「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安

穩であれ、安樂であれ」(145)<sup>(10)</sup>

「目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ」(147)<sup>(11)</sup>

ここには、永遠なるものゝに根ざした根源的・宇宙的欲求からほとぼり出る慈悲の念が、生きとし生けるものに及び、未来世代までも包括していく様相が示されている。「生物間倫理」と「世代間倫理」を貫いて、慈悲はすべての存在へと及んでいくのである。

釈尊は、その境地を、次のように開示している。

「また全世界に対して無量の慈しみの意を起こすべし」(150)<sup>(12)</sup>

マズローの示した基本的欲求から、自己実現の欲求のさし示す方向へと、人類共生の欲求、そして、本源的・宇宙的欲求を探求していくと、究極のところ、大宇宙と共生しゆくための慈悲心の偉大なる顕現に出会うことができるのである。そして、この慈悲の念は、す

べての存在の幸せを願いつつ、これまでのすべての欲求を包み返し、人間としての最高の「豊かな生」を成就させていくのである。

#### 〔4〕知足のライフスタイル

——真の「豊かさ」を生きるために

人間が真の「豊かさ」を生きるための、仏教からの指針を示した経典がある。

『仏遺教経』には、「知足の法は即ち是れ安樂安穩の處、知足の人は、地上に臥すと雖も猶安樂為り」とある。<sup>(13)</sup>その一方で、「知足の者は富むと雖も而も貪し」とも記されている。つまり、「知足」の人生は安樂であり、幸せであり、一方、「不知足」の人生は、たとえ物質的に富んでいるようであっても、貧しく、不幸であるとの意味である。このような、「知足」は豊かで幸福であり、「不知足」は貧しく、不幸であるとの価値観を、前章で論述した「七つの欲求」の段階説に当てはめてみると、次のようになるであろう。

「知足」とは、人間生命の内奥から顕在化する七つの

次元にわたる、すべての欲求を充足して生きることである。基本的欲求(四つの欲求)の充足の上に、成長欲求をかなえつつ、宇宙生命と一体となって生きる人生へと至るのである。たとえ、物質的に豊かであっても、他の欲求を発現していない生は「豊か」とはいえない。同様に、権力、名譽、名声等の社会的・心理的欲求にとらわれて、成長欲求を無視しての生も、けっして「豊か」とはいえないのである。

この七つの欲求は、暉峻淑子氏のいう「自主的に決定された欲望」に相当すると思われる。暉峻氏は次のようにいっている。

「もともと、生きるとは生命の全体的な發揮であり、偏った部分的な人生は豊かな人生とはいえないのである。私たちは食物、暖かさ、眠り、愛し愛されること、社会からはじきだされないうこと、教育、信念、文化的活動、政治参加などのすべてに対する欲求を持つ者として、全体として生きるのである。それが自己実現である」<sup>(15)</sup>

と記し、その後、大自然との共生をつづけられている。

ところで、これらの生命内包のすべての欲求が顕在化してくるためには、その生命を取り巻く社会が「豊か」であることが大前提である。「豊か」な社会のなかで、人間は、自らの生命のなかから「自主的に決定された欲望」を、次々と出現させ、充足させることができるのである。

「幸せな社会」のそなえるべき要件を、大石繁宏氏は、『幸せを科学する』<sup>(16)</sup>のなかで、次のような項目として抽出している。順不同で記述してみると、①全般的に豊かな国。国内総生産や購入力。②社会的安定性。秩序崩壊した社会は不幸。③信賴社会。他人を信賴できること。④人權の保護。思想・言論の自由、公平感、社会福祉の重視等である。

これらの「幸せな社会」の要件を、「七つの欲求」の充足のための社会条件として考えると、次のようになるであろう。

①の経済力は、「七つの欲求」の第一、生理的欲求の充足に必須である。

②の社会的安定性は、第二の安全、安定の欲求を

かなえる土台である。

③の信頼社会においてこそ、第三の所属の欲求と承認の欲求がかなえられるのである。

④の人権、自由、平等の保障された社会においてのみ、人間は、自尊、尊厳の欲求を発揮して生きられるのである。

以上のような「幸せな社会」「豊かな社会」を基盤として、人間は自己実現、人類共生、根源的・宇宙的欲求を発現しての「豊か」で「幸せ」な人生を開拓できるのである。

それでは、現実の社会はどうであろうか。開発途上国の人々が、まだ、第一の生理的欲求、第二の安全・安定の欲求すらかなえられていないことは明白であり、先進諸国の人々の第八、人類共生、他者貢献の欲求の実践である援助、貢献が関わっていないかなければならぬのである。

今日の世界において、先進諸国といわれる国々は、「生活必需品」が十分に行き渡った社会ではある。しかし、そのことによって、「七つの欲求」のうちの四つの「基本

的欲求」さえ充足しているとは考えられないのである。

その理由として、仏教の欲望論は、「欲望」の「貪欲化」を指摘するのである。「貪欲」とは、すでに述べたように、モノとカネという物質的欲望や権力、名誉欲、名声欲等の心理的・社会的欲望への執着心をさしている。その結果、貪欲は、他者を犠牲にし、他者を破滅に追いこんでまでも、自律的にコントロールできない衝動となる。つまり、「かきたてられた欲望」である。

経済力のもたらす物質的欲求の貪欲化がおき、生理的欲求の範囲を大きく超えて、物質とエネルギーの浪費社会をつくり出している。広告、宣伝、映像等に含まれる「悪見」に駆り立てられて、貪欲は倫理性を失い、他者を傷つけていることにも気がつかない状況に陥っている。自然生態系を含む環境を傷つけ、破滅に追いつき、同時に自己の身体を病的状況に陥れても、なお、コントロールできないのである。その象徴が、麻薬、覚せい剤、アルコール依存症であり、また、生活習慣病や心身症の悪化を自らコントロールすることができないのである。

さらに、物質的欲望は、生命内在の他の煩惱をも引きずり出してゐる。曠患の煩惱も、貪欲化してコントロール不能に陥り、忿・恨・惱・嫉となり、ついに害(暴力性)となつて爆発し、第二の基本的欲求である安全・安定の欲求の基盤を突き崩している。物質的には比較的豊かになつた先進諸国においてさえも、犯罪、暴力行為の増加、テロの脅威におびやかされ、暴力性の内攻は、自殺の増加を引き起こしている。同時に、不信、敵意、無慈悲、差別、排除等の煩惱が、相互信頼にもとづく欲求である第三の所属の欲求と承認の欲求を拒否している。個人は他者と分断され、孤立感にさいなまれている。第四の自尊・尊厳の欲求は、その倫理性を失い、エゴイズムと慢心の煩惱に取り込まれ、「勝他の念」と化している。そこから、各種の人権侵害、他者の自由の抑圧、思想・言論の抑圧のエネルギーとなつて弱肉強食の社会をつくり出そうとしている。強欲の資本主義といわれるものも、「勝他の念」の経済界における一つの表出であらう。

仏教の視点からすれば、欲求不満や精神の飢餓感は、

貪欲化したあらゆる煩惱に取り込まれての、人間精神の自律的な善心の呼びかけではないだろうか。成長欲求は善心のあらわれであり、その顕在化は、マズローの自己実現の欲求を超えて、自己超越の欲求——すなわち、人類共生から大宇宙との一体化への欲求となつてあらわれるものである。それ故に、まず人々が、貪欲化した煩惱を見据えて、それに振り回されることなく、自覚的に善心の顕在化とその深化につとめる行為が、要請されるのである。

善心による、基本的欲求(四つの欲求)の、本来的な姿への転換とは、「自主的に決定された欲望」の充足へと変革していくことである。善心の顕在化には、情報、通信機関や、長期的には教育を通して、正見(善見)を社会に広く、深く伝えゆく努力を、お互いに協力しあつて持続していくことである。

善心のあらわれとしての善見(正見)を触発する源泉には、世界の偉大な宗教、思想、哲学があり、そこには、人間の本来的な生き方、真の「豊かさ」を生きる智慧、人間倫理とそれにもとづく環境倫理等が含まれている。

また、地球環境問題に焦点を当てていえば、ローマクラフのこれまでの書『成長の限界』、『成長の限界を超えて』、そして池田SGI会長とペッチェイ氏との対談『二十一世紀への警鐘』、ホフライトネル氏との対談『見つめあう西と東』、そしてヴァイツェッカー博士の『ファクター4』、『ファクター5』、アル・ゴア氏の『不都合な真実』、『地球の掟』等の良書がある。仏教の立場からは、先日、『大乘仏教の挑戦——地球環境と仏教』を東洋哲学研究所の研究員が出版している。

これらの良書——つまり、善心を触発し、善見を養うに足りる書を、自ら思索し、自らの基本的欲求の貪欲化を防ぎつつ、成長欲求、特に第六の人類共生、他者貢献の欲求を実践しゆくところに、「善心の連帯」の輪が広まっていくのではないだろうか。その具体的実践のあり方を、『ファクター4』、『不都合な真実』のなかに数多く見出すことができる。他者への貢献、そして他者との「善心の連帯」の行動を、地域から民族、国家、世界へと広げていくことのなかに、より「豊かな」社会へと変革しゆく道が開かれていくのである。

善心の開発から、他の欲求の活用、そこから真の「豊かさ」、真の「幸福」がもたらされることを、日蓮も、仏教の本義にもとづいて、次のように説いている。

「蔵の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」<sup>(17)</sup>〔崇峻天皇御書〕

この文を、池田SGI会長は次のように解説している。

「『心の財』を根本とした時に、実は『蔵の財』も、『身の財』もその真実の価値を正しく發揮することができなのです。一言で言えば、『心の財を築く』という人生の根本目的が大事です。この根本目的を喪失してしまえば、たとえ『蔵の財』や『身の財』をもつていようと、それらへの執着が生ずる。それは失うことへの不安ともなり、かえって苦しみ因となる。あくまで大事なものは、『心の財』を積み上げていくことです。ここに正しい人生の目的観があります」<sup>(18)</sup>

ここに「蔵の財」とは、物質的財産とされ、「身の財」とは、健康や身につけた技能、知識等をさしている。「心



の財」は、人間生命に内在する善心であり、すべての成長欲求を含んでいる。人類の根本目的が「心の財」を築くこと、すなわち、善心の開発であることを見失うと、現代文明が陥っているように、「蔵の財」に執着し、貪欲をはじめ多くの煩惱を引きずり出し、その結果、「身の財」の活用にも支障をきたし、「心の財」の開発に向かうことさえ困難な状況になってくる。

仏教は、「心の財」、すなわち善心の開頭を中軸として「豊かな社会」、「幸福な社会」の創出をめざしている。

釈尊は、「この上なき幸せ」とのテーマで、『スッタニパータ』で詩句を残しているが、その大部分は、「心の財」、すなわち善心の問題に向けられている。アトランダムに詩句をひろってみると、次のようなものがある。

「多くの神々と人間とは、幸福を望み、幸せを思っています。最上の幸福を説いてください」(25)<sup>(8)</sup><sup>(19)</sup>

そして、まず、

「諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人々を尊敬すること、——これが

こよなき幸せである」(259)<sup>(20)</sup>

愚者や、まして悪人に親しんで、煩惱を引きずり出すのではなく、尊敬すべき賢者に親しんで、善心を開頭することが幸せであるという。

同じように、善心の開発、開頭については、次のような詩句がある。

「耐え忍ぶこと、ことはのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、適当な時に理法についての教えを聞くこと、——これがこよなき幸せである」(266)<sup>(21)</sup>

ここに理法とは、仏教では「縁起の法」であり、宇宙と生命の根源の法である。すなわち、根源的・宇宙的欲求をかなえる永遠なる宇宙法である。その理法を修養し、行動のなかに体现すれば、安穩の境地を得られるというのである。

「修養と、清らかな行いと、聖なる真理を見ること、安らぎを体得すること、——これがこよなき幸せである」(267)<sup>(22)</sup>

ここに「聖なる真理」は、宇宙根源の法である「理法」

である。

善心としての内容をあげる詩句もある。

「尊敬と謙遜と満足と感謝と（適当な）時に教えを聞くこと、——これがこよなき幸せである」（26

5<sup>(23)</sup>

ここに「感謝」とは「知恩」のことである。他者の恩を知り、それに応じようとする時に、「感謝」の心が生じてくる。縁起の法である相依相資の実践である。

このような善心や理法の顕在化とは、悪をとどめる倫理性、戒を発現することである。

「悪をやめ、悪を離れ、飲酒をつつしみ、徳行をゆるがせにしないこと、——これがこよなき幸せである」（264<sup>(24)</sup>

悪とは煩惱に支配された行為であり、それを根絶することをいわれている。中村元氏は、「飲酒をつつしむ<sup>(25)</sup>」ということは、インドはとくに暑い国なので、飲酒はよけいに体にひびくことからいわれたことと、解説されている。飲酒のコントロールとれば、アルコール依存症への警句である。今日では、麻薬、覚せい剤

の禁止、ギャンブルへの警句でもある。

さらに、善心は他者に向かつて、善行となっていくのである。

「施与と、理法にかなった行いと、親族を愛し護ることと、非難を受けない行為、——これがこよなき幸せである」（263<sup>(26)</sup>

施与とは、他者への布施行であり、第六の他者貢献の欲求に相当する。これらの善心の開発による善行は、「身の財」や「蔵の財」をも生かしていくことができる。

「深い学識あり、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学び、ことばがみごとであること、——これがこよなき幸せである」（261<sup>(27)</sup>

「父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、——これがこよなき幸せである」（262<sup>(28)</sup>

「適当な場所に住み、あらかじめ功德を積んでいて、みずからは正しい誓願を起していること、——これがこよなき幸せである」（260<sup>(29)</sup>

ここに「適当な場所」とは「蔵の財」であるが、「学ぶこ

と「技術を身につけ」ること、「仕事に秩序あり混乱せぬこと」「身につしむこと」は「身の財」である。更に、「ことばがみごとであること」や「父母や妻子」との愛情は、信頼社会の基盤である。なお、ここには、父母と子の関係が述べられているが、仏教では、父母から子どもへ、妻から夫への愛情についても「相依相資」性にもとづいて考えられている。ある人の父母や妻子との関係は、ともに愛し合い、資けあう相互関係なのである。

そして、「功德を積むこと」とは、他者への倫理的行為が、自己自身の徳(善業)となって蓄積されることであり、「正しい誓願」とは、善心にもとづいて、第六の他者貢献の欲求、人類共生の欲求をはたしゆくことである。

仏教では、このような善心による善行を、さまざまな次元で実践し、四つの基本的欲求の充足をかなえるのみならず、それを拡充し、成長欲求に支えられて、家族、民族、国家、文化、文明、そして自然生態系と一体となった人類共生の社会をめざすのである。

SGIは、個人の努力とともに、目覚めた民衆との「善

心の連帯」を拡大し、「善心の循環」を全世界へと広めていくために、平和、軍縮、人権、人道問題、文化、教育に関する活動を繰り広げているが、最後に、「持続可能な開発」に関する活動を紹介しておきたい。

SGIでは、二〇〇五年からスタートした国連の「教育の10年」を支援し、教育教材として、映画「静かなる革命」を地球評議会、国連環境計画、国連開発計画と協力して制作、上映。地球憲章委員会と共同制作した「変革の種子」展を世界各地で開催。また、自然保護活動として、ブラジルSGIが「熱帯雨林再生研究プロジェクト」を一九九三年から展開し、アマゾン川流域の生態系の保全のため、植林、種子の保存を行なっている。植林は、カナダやフィリピンの各国のSGIでも展開している。

これらのSGIの活動の目的を、池田SGI会長は「I・26提言」(二〇〇八年)で、次のように述べている。

「かつて私は、『持続可能な開発のための教育の10年』の制定を呼びかけるにあたり、環境問題解決のためには、制度面での整備といった上からの改

革々だけでなく、草の根レベルで行動の輪を広げ、目覚めた民衆の力を結集していく、下からの変革が欠かせないと強調しました。(中略)『教育の10年』を軌道に乗せ、地球環境の悪化を食い止められるかは、一人でも多くの人々が自身の問題として受け止め、具体的行動を起こせるかどうかにかかっています。すなわち、持続可能な未来を築くために、個人や家族、地域社会や職場といった、身近なところから何ができるかを話し合い、共に行動を始めることが何よりも求められているのです<sup>(30)</sup>」

今日のこのシンポジウムが、ヴァイツェッカー博士をはじめ、ご出席の皆さんからの貴重な提言、発言を受け、ともに、それらを実践へと具体化させながら、民衆の草の根レベルの行動のネットワークを広げゆく機会となることを期待しております。

注

- (1) エルンスト・U・フォン・ワイツェッカー他著／佐々木建訳『ファクター4』財団法人省エネルギーセンター、一九八八年、四二四ページ。
- (2) 同書、四二五ページ。
- (3) 同書、四二三ページ。
- (4) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、一九八九年、八九ページ。
- (5) 同書、八九〜九〇ページ。
- (6) 中村元訳『ブッタのことは スッタニパータ』岩波書店、一九八四年、三一〜三二ページ。
- (7) 欲求の階層説。上田吉一『自己実現の真理』誠信書房、一九七九年、五〜五三ページ。
- (8) 諸良祥彦『生きがい発見の心理学』(上)、NHKシリーズ、二〇〇二年、七八ページ。
- (9) 四撰事。『雑阿含経』卷二六、『大正大藏経』卷二、一八五ページ上。
- (10) 中村元訳『ブッタのことは スッタニパータ』岩波書店、一九八四年、三七ページ。
- (11) 同書、三七ページ。
- (12) 同書、三八ページ。
- (13) 『仏垂般涅槃略説教誡経』(亦名仏遺教経)、『大正大藏経』卷二二、一一一〜一二二ページ下。
- (14) 同。
- (15) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、一九八九年、

- 二三五ページ。  
二二五ページ。
- (16) 大石繁宏『幸せを科学する』新曜社、二〇〇九年、一六七～一七三ページ。
  - (17) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会版、一一七三ページ。
  - (18) 『大白蓮華』聖教新聞社、七一九号、六八ページ。
  - (19) 中村元訳『ブツダのことは スッタニパータ』岩波書店、一九八四年、五七ページ。
  - (20) 同書、五八ページ。
  - (21) 同書、五八ページ。
  - (22) 同書、五八～五九ページ。
  - (23) 同書、五八ページ。
  - (24) 同書、五八ページ。
  - (25) 中村元『原始仏典Ⅱ 人生の指針』東京書籍、三四ページ。
  - (26) 中村元訳『ブツダのことは スッタニパータ』岩波書店、一九八四年、五八ページ。
  - (27) 同書、五八ページ。
  - (28) 同書、五八ページ。
  - (29) 同書、五八ページ。
  - (30) 池田大作『平和の天地 人間の凱歌』（第33回SGIの日・記念提言）、創価学会広報室、二〇〇八年、四七～五〇ページ。

（かわだ よういち／東洋哲学研究所所長）